



Vol.9

発行 2010年8月

動物愛護ボランティア

《ねこの会》

事務局：TEL/FAX 0263-36-2192

つくば発・猫不在生活

岡田 英二

つくばでの生活は修行僧のような過酷な行をこなす一日に明け暮れ、行政・独法叩きが日常化した昨今では、世間の目が厳しくて民間にもないような毎日です。かつて政府が法律を制定させようとしたホワイトカラー・イグザンブションをご存じですか？役職の立場から私の場合はそれに相当し、平日は12時間勤務、休日出勤、カイコの飼育時期の50日間は休み無しという状態です。さらに追い打ちを掛けるように高温・高湿の気候で、夏の夜は少しも気温が下がってくれず、この過酷さでは、夜間によく眠ることが出来た松本が懐かしく思われます。

こうした勤務状態では一向に猫の世話なんか出来ず、ましてや何日もの長期出張などあったときには、目も当てられません。無理を言って松本の「ねこの会」の友人に預けている状態です。中国からの出稼ぎ労働者が両親に子供を預けての就労と聞きますが、私も同様の有様です。社会主義では親が子育てという概念はなく、働くことが一番大事なので、子育ては父母や保育所など出来る人がやれば良いと言うこととなります。

猫たちが家にいて待っていると、頭の隅にその事を気に掛けて暮らしていますが、居ないとなると安気になります。昼に帰って様子を見たり、買い物時には猫の餌やトイレの事まで調達するために、何軒かの量販店を渡り歩く必要がなくなります。昼は弁当を買ってきて、食べながらパソコンに向かう様なことになってしまいます。夕食も時には外食で済ませ、夜中まで仕事の続きに没頭する毎日です。昼間はカイコの世話や会議、雑用等があるので事務処理から書類作成や論文書きは夜の仕事になってしまい、卒業が迫っている学生時代と同じような事になっています。

役人の中には、一般的に、9時から出勤し、昼間は机に座っているだけで良く、5時には帰宅するような仕事をしている人も一部いますが、事務職や業務職だけを見ると誤解があり、我々、独法の研究職には当てはまりません。また、昔の公務員は組合活動に加担し、楽して収入を守ろうとする事をしましたが、いまの世代にはそんな時間はありません。楽をすると、実験は失敗し研究は停滞する。成果が出ないと論文が出せない。会議で絞られ、査定で昇給・昇格無しという厳しい結果が自分に返ってきます。もう公務員ではないので、最悪の場合はクビです。

カイコは優秀な研究素材ですが、なかなか上手に飼育できる人がいないのが実情で、結局自分で飼うこととなります。繭の生産だけなら農家でも外国でも良いのですが、カイコの体内に他の物質を注射したり、有用物質を作るための遺伝子組み換えのための実験昆虫として使うので、ウイルスやカビに汚染され病気で死んでしまうことがないように、最善の注意を払って衛生管理と環境整備を維持しながら大切に飼育します。

こうして長い間生物と関わっていますから、カイコにしても猫にしても同じです。動物の飼育は最善の注意と取り扱いを図らないといけない所と、アバウトでも十分どころの見極めが大事です。すべて全力でという、緊張して気の抜けない飼育だけではこちらが保ちません。本や文章で勉強したことと経験で学んだことを上手に組み合わせて関わり方を調節出来るような人間に成ることから始まり、柔軟に生物に関わる事が出来たなら、優秀な飼育者になれること間違い無しだと考えます。猫だってそっちの方が良さそうです。

生物である人間が他の生物を扱うのですから、生物である自分をもっとも良い環境にあること、生身の自分に置き換える感覚こそが鍵になりそうです。